

## メッセージアウトライン サムエル記第一4:1～22

### 「栄光は去った」

[1]「サムエルのことばが全イスラエルに行き渡ったところ、イスラエルはペリシテ人に対する戦いのために出て行き、エベン・エゼルのあたりに陣を敷いた。一方、ペリシテ人はアフエクに陣を敷いた」

年月が経ち、少年サムエルは成長し、イスラエルの最後のさばきつかさ(士師)そして預言者としてイスラエル全土に名が知られるようになっていた。時代はBC 11世紀の終わり頃と思われる。

「ペリシテ人」…BC 15~13世紀頃小アジアの西南部クレタ島方面からパレスチナの沿岸地方に侵入し、海沿いの平野に定住した民族。一部はアブラハムの時代から住んでいた。→創世記21:34、26:1、18 イスラエルとは長い戦いの歴史がある。

「エベン・エゼル」…エルサレムの北10数キロメートルの地と思われる。「アフエク」はその近くであろう。

[2]「ペリシテ人はイスラエルを迎え撃つ陣備えをした。戦いが広がると、イスラエルはペリシテ人に打ち負かされ、約四千人が野の戦場で打ち殺された」

ペリシテ人はイスラエル人の住む山地よりも、馬や戦車を駆使しやすい「野」(平野、平地)を戦場として選んだのであろう。この戦いの結果、イスラエル人約四千人が打ち殺された。

[3]「兵が陣営に戻って来たとき、イスラエルの長老たちは言った。『どうして主は、今日、ペリシテ人の前でわれわれを打たれたのだろうか。シロから主の契約の箱をわれわれのところに持って来よう。そうすれば、その箱がわれわれの間に来て、われわれを敵の手から救うだろう。』」

「契約の箱」とは主の臨在を象徴するもので、主の命によってシナイの荒野を旅する出エジプト時代に造られ、十戒の記された石板、芽を出したアロンの杖、マナの入った金の壺が収められていた。イスラエルの長老たちは戦いに負けた原因を分析し、主なる神の選びの民である自分たちが戦いに負けたのは、主の臨在する契約の箱を自分たちとともに出陣させなかったからだと考えた。それで次の戦いの時には契約の箱を安置してあるシロから持って来よう。そうすればその箱によって、われわれは敵の手から救われるだろう、すなわち戦いに勝利するだろうと考えた。

しかし、ここには自分たちの日頃の生活の悔い改めというものが見られない。彼らは主なる神のみではなく、農業神といわれるバアルやアシュラなどの偶像も礼拝していた。これはもう多神教である。そして、目の前の物質的なもののみを追い求

め、道徳的にも乱れ、好き勝手な生き方をしていた。彼らは主のみこころにかなった生き方をしていなかった。それこそ真の敗因である。→出20章十戒 そのことに思い至らず、ただ契約の箱を担ぎ出せば戦いに勝てるだろうという程度の考えしかイスラエルの長老たちは持っていなかったのである。アイでの戦いになぜ敗れたか彼らは思い出さなかったのか。→ヨシュア記7章

[4-5]「兵たちはシロに人を送り、そこから、ケルビムに座しておられる万軍の主の契約の箱を担いで来させた。そこに神の契約の箱とともに、エリの二人の息子、ホフニとピネハスがいた。主の契約の箱が陣営に来たとき、全イスラエルは大歓声をあげた。それで地はどよめいた」

「ケルビム」…単数「ケルブ」の複数形。神の臨在を示す天的存在で有翼人身であり御使いとも考えられる。→エゼキエル10章。金で造られたこのケルビムの像が契約の箱のふたの上に互いに向かい合ってふたを覆うように置かれていた。→出25:17-20

この主の契約の箱がイスラエルの陣営に来たとき、全イスラエルは大歓声をあげ、地はどよめいた。エリの二人の息子ホフニとピネハスは祭司であったので、この契約の箱についてやって来たのである。

[6-8]「ペリシテ人はその歓声を聞いて『ヘブル人の陣営の、あの大歓声は何だろう』と言った。

そして主の箱が陣営に来たと知ったとき、ペリシテ人は恐れて、『神が陣営に来た』と言った。そして言った。『ああ、困ったことだ。今までに、こんなことはなかった。ああ、困ったことだ。だれがこの力ある神々の手からわれわれを救い出してくれるだろうか。これは、荒野で、ありとあらゆる災害をもってエジプトを打った神々だ。』

「ヘブル人」とは外国人がイスラエル人を呼ぶときに用いることば。またイスラエル人が外国人と対比して自らを名乗るときにも用いる。

「今までに、こんなことはなかった」とはイスラエル人が今まで神の箱をどの戦いにも担ぎ出したわけではなく、彼らが今度の戦いに最大の決意で臨んでいるということを示している。

ヘブル語では7節の「神」も8節の「神々」も同じ「エロヒーム」ということばが用いられている。これは「威厳の複数形」と呼ばれる用法で、主なる神の威厳を表すためにあえて複数形が用いられているが意味は単数である。

「これは、荒野で、ありとあらゆる災害をもってエジプトを打った神々だ」…イスラエルの神がエジプトで行われたみわざは当時、すでに多くの国々に知れ渡っていたことがわかる。イスラエル人よりペリシテ人の方がイスラエルの神を恐れているのである。

[9-11]「『さあ、ペリシテ人よ、奮い立て、男らしくふるまえ。そうでないと、ヘブル人がおまえたちに仕えたように、おまえたちがヘブル人に仕えるようになる。男らしく

ふるまって戦え。』こうしてペリシテ人は戦った。イスラエルは打ち負かされ、それぞれ自分たちの天幕に逃げ、非常に大きな打撃となった。イスラエルの歩兵三万人が倒れた。神の箱は奪われ。エリの二人の息子、ホフニとピネハスは死んだ」

戦いは神の箱を担ぎ出したイスラエル人の思惑どおりにはならず、かえってペリシテ人に徹底的に打ち破られ、歩兵三万人が倒れ、他の者は自分たちの天幕に逃げ帰り、彼らが寄り頼んだ神の箱は奪われ、ホフニとピネハスも死んだ。最悪の結果である。イスラエル人は主の箱を戦場に担ぎ出せば自動的に主が力を現わして敵を打ち破ってくれると思っていたのであろうか。しかし、それはとんでもない間違いであった。

[12-15]「一人のベニヤミン人が戦場から走って来て、その日シロに着いた。衣は裂け、頭には土をかぶっていた。彼が着いたとき、エリはちょうど、道のそばの椅子に座って見張っていた。神の箱のことを気遣っていたからである。この男が町に入ってきて報告すると、町中こぞって泣き叫んだ。エリがこの泣き叫ぶ声を聞いて、『この騒々しい声は何だ』と言うと、男は大急ぎでやって来てエリに知らせた。エリは九十八歳で、その目はこわばり、何も見えなくなっていた」

「衣を裂き頭に土をかぶる」のは大いなる悲しみや嘆きを表す表現。戦場から走って来た男は敗戦の知らせを持って来たのである。イスラエル敗戦の悲報を聞いて、町中こぞって泣き叫んだのは当然であろう。彼は町の者に知らせるのを急ぐあまり、椅子に座っていたエリの前を気付かずに通り過ぎて、人々に報告し、それからエリの問いかけに答えるために彼の座っていたところに戻って来たのであろう。この時エリは九十八歳にもなり、視力はなくなっていた。

[16-18]「男はエリに言った。『私は戦場から来た者です。私は、今日、戦場から逃げて来ました。』するとエリは『わが子よ、状況はどうなっているのか』と言った。知らせを持って来た者は答えて言った。『イスラエルはペリシテ人の前から逃げ、兵のうちに打ち殺された者が多く出ました。それに、あなたの二人のご息子、ホフニとピネハスも死に、神の箱は奪われました。』彼が神の箱のことを告げたとき、エリはその椅子から門のそばにあおむけに倒れ、首を折って死んだ。年寄りで、からだが重かったからである。エリは四十年間、イスラエルをさばいた」

エリは戦場から逃げて来た男に戦いの状況を問う。「わが子よ」とは親しみを込めた呼びかけ。

しかし、その報告は悲惨なものであり、イスラエルの多くの兵の戦死、エリの二人の息子ホフニとピネハスも死に、そして彼が最も気にかけていた神の箱もペリシテ人に奪われたことを告げた。

神の箱が奪われてことを聞いたとき、エリは非常なショックを受けたのであろう。彼は座っていた椅子からあおむけに倒れ首を折って死んでしまった。「からだが重かった」というのは体重が増えて太っていたという意味ではなく、年寄りになってから

だが思うように動かさず、結果的に体が重く感じていたという意味であろう。このエリの家起きた一連の出来事は2:27~36節と3:11~14節の成就として記されていることは明らかである。それはエリの家へのさばきとその没落に関することである。さらには神の箱まで奪われてしまったのである。

[19-22]「彼の嫁、ピネハスの妻は身ごもっていて出産間近であったが、神の箱が奪われて、しゅうとと夫が死んだという知らせを聞いたとき、陣痛が起こり、身をかがめて子を産んだ。彼女は死にかけていて、彼女の世話をしていた女たちが『恐れることはありません。男の子が生まれましたから』と言ったが、彼女は答えもせず、気にも留めなかった。彼女は、『栄光がイスラエルから去った』と言ってその子をイ・カボデと名づけた。これは、神の箱が奪われたこと、また、しゅうとと夫のことを指したのであった。彼女は言った。『栄光はイスラエルから去った。神の箱が奪われたから。』」

ピネハスの妻はこの時、出産間近であったが、神の箱が奪われたこと、そして、しゅうとと夫が死んだという衝撃的な知らせを聞いて、急に陣痛が起こり、身をかがめて子を産んだ。彼女の出産は難産であった。このような場合には母体にも危険が及び、死の危険性があることが今日では医学的にも知られている。男の子誕生の知らせを彼女は聞くが、死に臨んでいた彼女は答えもせず、ただ彼女の口から出たことばは「栄光がイスラエルから去った」であった。そしてその子を「イ・カボデ」と名づけた。「イ」は否定詞、「カボデ」は栄光で、「栄光がない」すなわち「栄光が去った」とい意味になる。神の臨在の象徴である神の箱が奪われるということは、神の保護、祝福、契約も取り去られることを意味し、神の祭司であるしゅうとエリと夫ピネハスの死も加わり、もはやイスラエル存続の希望もなくなってしまうと彼女は思ったのであろう。あとは敵のペリシテ人の侵略を受けてイスラエルが滅びるのみか。

確かにこれは先祖アブラハム以来の神の選びの民であるイスラエルにとって民族存続の根幹を揺るがす歴史的な大事件であるが、そもそもイスラエルがこのような敗戦をしなければならなかったのは、彼らの神の民としての生き方が神のみこころにかなった正しいものではなく、神のさばきを受けなければならないほどの罪深い生き方をしていたからであり、それゆえ、神は祭司エリとその家、そしてイスラエルをペリシテ人を用いてさばかれたのである。

彼らは心からの悔い改めをもって主なる神に助けを祈り求めるべきであった。その信仰があれば主は助けてくださったであろう。しかし、残念ながら彼らはそうしなかった。

ピネハスの妻が死に臨んで言った「栄光がイスラエルから去った」は確かにその時のイスラエルの現実であった。しかし、なおイスラエルの歴史は続いていく。主なる神はペリシテ人を用いてイスラエルをさばかれたが、なおも摂理のうちにイスラエルを導いていかれる。

私たちもこの箇所から教訓を学び、自分の信仰生活が主のみどころにかなったものであるかよくよく点検し、主にさばかれるような生き方があるならば悔い改めて正しい信仰の歩みをしていかなければならない。→ Iヨハネ1:6～9